◆、『大鏡』「道長伝」

　　　　　　　　　　五月下旬　　　　　　　　　　　　　　　（

注花山院の御時に、五月下つ闇に、五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくか

）　　　　　　　（　　　　　　　　　　　　）〔　　　　　〕は

きたれ、雨の降る夜、帝、さうざうしとや思し召しけむ、殿上に出でさせおは

昔恐ろしかった

しまして、遊びおはしましけるに、人々、物語申しなどし給ひて、昔恐ろしか

ことなどに話題が移って（お話を）申し上げなさっていた時に「

りけることどもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむつかしげなる夜なめ

このように人が何人もいる所でさえ、不気味な感じがする。

れ。かく人がちなるにだに、イ気色おぼゆ。　まいて　、もの離れたる所などいか

ならむ。

　　　　　　　　　」とおっしゃったところ〔　　　　　〕は「　　　　　　　」と

⑤さあらむ所に一人往なむや」と仰せられけるに、「えまからじ」とのみＣ申し

　　　　　　　　　　「　　　　　　　　　　　　　」

給ひけるを、　Ⅱ　は、「いづくなりともまかりなむ」と申し給ひければ注さる所

おはします帝にて、「いと興あることなり。さらば行け。道隆は、道兼は

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　道長が

の、道長はへ行け」と仰せられければ、よその君達は、⑥便な

きことをも奏してけるかなと思ふ。また、⑦承らせ給へる殿ばらは、御ウ気色か

「困ったことだ」とお思いになっているのに

はりて、なしと思したるに、入道殿は、⑧つゆさる御エ気色もなくて、

「私の従者をば具し候はじ。この陣の注吉上まれ、滝口まれ、一人を、『昭慶門

（天皇様から）御命令をお与え下さい。　　　　　　　　　　　」

まで送れ』と仰せ言たべ。それよりうちには一人入り侍らむ」と申し給へば、「証

「証拠のないことだ」

なきこと」とＤ仰せらるるに、「げに」とて、御手箱に置かせ給へる注小刀申して

しぶしぶそれぞれお出掛けになった。

立ち給ひぬ。いま二所も、注苦む苦むおのおの注おはさうじぬ。

　　　○入道殿…藤原道長

　　　　○さるべき人…入道殿（＝藤原道長）のように後年偉くなる人。

　　　　○花山院の御時…花山院がご在位の時。花山院の治世は永観二年（九八四）八月から寛和二年六月まで。後の「帝」も、花山院を指す。

　　　　○さる所おはします…「変わった事に興味をお持ちになる性格」の意。

　○吉上まれ、滝口まれ…「吉上であっても、滝口であっても」の意。吉上は六衛府の下役、滝口は

清涼殿の北の滝口の陣に詰めていた武士。いずれも宮中の警備に当たる役。

○小刀申して…ここでは小刀を「借りる」の意。

○苦む苦む…しぶしぶ、いやいやながら

○おはさうじぬ…「おはさうず」は「行く」の尊敬語。主語は複数になる。

○宴の松原＝右衛門の陣を出たところにある松林で、豊楽院の北側に位置する

問一　傍線部①「わが子供」とあるが、ここでの「子供」の中に含まれない人物を答えなさ

イ　藤原道隆　　ロ　藤原道兼　　ハ　藤原道長　　ニ　藤原道綱

問二　傍線部②・④の本文中での意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選びなさい。

② おどろおどろしくかきたれ

　イ　音もなくぽつりぽつりと降り　　　ロ　大げさに降ったりやんだりし

ハ　驚くほどしとしとと降り　　　　　ニ　不気味なほどざあざあと降り

④ むつかしげなる夜なめれ

イ　不安な夜になってしまえ　　　　　ロ　気味の悪い夜のようだ

ハ　不気味な夜である　　　　　　　　ニ　さまざまに不都合な夜らしい

問三　傍線部③「さうざうしとや思し召しけむ」を現代語訳しなさい。

問五　傍線部⑤「さあらむ所」とはどのような所か。簡潔に答えなさい。

問六　太線部Ａ～Ｆの主語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

イ　帝　　　ロ　入道殿　　　ハ　道隆と道兼　　　ニ　道隆と道兼と道長

ホ　人々ヘ　よその君達　　　ト　公任

問七　文中の　Ⅱ　に入る人物名を本文中の言葉で答えなさい。

問八　傍線部⑥はどのようなことを指すか。本文中から抜き出しなさい。

問九　傍線部⑦と同じ内容の言葉を「こと殿たち」以外のものを本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問十　傍線部⑧「つゆさる御気色もなくて」を「さる」の内容を明らかにして現代語訳しなさい。

問十一　波線部ア～オの「気色」について、これらの中に一つだけ他の「気色」と意味の異なるものがある。その記号を答えなさい。

問十二　文中の　Ⅲ　に入る語を本文中の一字で答えなさい。

問十三　傍線部⑨「かくて」の「かく」が具体的に指し示している箇所を抜き出しなさい。

**古文・第６講**

　解答

問一　ニ

問二　②ニ　④ロ

問三　物足りないとお思いになったのだろうか

問四　まいて（まして）

問五　遠く離れた人気の無い所

問六　Ａハ　Ｂト　Ｃハ　Ｄイ　Ｅイ　Ｆハ

問七　入道殿／道長

問八　いづくなりともまかりなむ

問九　いま二所／こと殿たち

問十　少しも動揺したり困ったと思う（怖がる・気落ちする）御様子もなくて

問十一　イ

問十二　証

問十三　高御座の南面の柱のもとを削り

全訳

花山院の御世に、五月下旬の闇夜（の頃）に、五月雨といっても程度がひどく、たいそう不気味なほどひどくざあざあと雨の降る夜、天皇〔＝花山院〕は、もの寂しいとお思いになったのであろうか、（清涼殿の）殿上の間にお出になって、（殿上人たちと）管弦の遊びなどをしていらっしゃったが、人々がお話を申し上げなどなさって、昔恐ろしかったことなどに話題が移って（お話を）申し上げなさっていた時に、（天皇が）「今夜はとても気味の悪い夜のようだ。このように人が何人もいる所でさえ、不気味な感じがする。まして、遠く離れた人気の無い所などはどのようであろうか。そのような所に、一人で行けるだろうか」とおっしゃったところ、「参れそうにありません」とばかり（人々は）申し上げなさったのに、入道殿は、「どこへなりとも参りましょう」と申し上げなさったので、（この天皇は）そういう（一風変わった物好きな）ところのおありになる天皇なので、「たいそうおもしろいことだ。それならば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁寿院の塗籠、道長は大極殿へ行け」とおっしゃったので、他の関わりのない君達は、「具合の悪いことを（入道殿は）申し上げたものだな」と思う。また、（勅命を）お受けになった殿方達は、お顔色が変わって、「困ったことだ」とお思いになっているのに、入道殿は、少しもそのような御様子もなくて、「私個人の従者は連れて行きますまい。この（警護の者の）詰所の吉上であってもよい、滝口の武士であってもよい、一人に対して、『（道長を）昭慶門まで送れ』と（天皇様から）御命令をお与え下さい。その昭慶門から内部には、私一人で入りましょう」と申し上げなさると、「（それでは大極殿まで行ったかどうか）証拠のないことだ」と（天皇が）おっしゃるので、（入道殿は）「なるほど」といって、（天皇が）御手箱にお置きになっている小刀をお借りしてお立ちになった。他のお二人も、しぶしぶそれぞれお出掛けになった。

「子四つ」 と（誰かが帝に）申し上げ、このようにおっしゃって相談しているうちに、丑の刻にもなったでしょうか。「道隆は右衛門の陣から出発しなさい。道長は承明門から出発しなさい。」と、（帝は）出発する門までもお分けになられました。中関白殿（道隆）は、右衛門の陣までは我慢なさっていましたが、宴の松原のあたりで、得体のしれない声が聞こえたので、なす術がなくお帰りになります。粟田殿（道兼）は、露台の外まで、震えていらっしゃいましたが、仁寿殿の東面の砌のあたりに、軒と同じぐらいの大きさの人がいるようにお見えになったので、どうしてよいかわからなくなり、「体が無事だからこそ、ご命令をお受けすることができましょう。」といって、それぞれ引き返していらっしゃったので、（帝は）扇をたたいてお笑いになります。入道殿（道長）は、ずいぶんとお見えにならないので、どうしたものかと（帝が）お思いになっているうちに、さりげなく、何事もなかったかのように、参上なさいます。「どうであったか。」と（帝）がお尋ねなさると、大変落ち着いて、（借りた）刀と削られた物を一緒にして（帝に）差し上げなさいます。「これは何か？」と仰るので（道長は）、「ただ帰って参っただけでは、証拠にはならないでしょうから、高御座の南面の柱の下の部分を削って参りました。」と平然と申し上げなさったので、とても驚きあきれていらっしゃいます。他のお２人のお顔色は、依然として元に戻らないのでいます。この殿（道長）がこのように帰ってまいられたのを、帝をはじめ（周りの人たちが）感心してお褒めになられたのを、うらやましく思ったのでしょうか、それともどのような理由ででしょうか、何も言わずに控えていらっしゃいました。

（帝は）それでも疑わしくお思いになったので、（次の日の）早朝に、「蔵人に、削り屑と柱の削った跡を合させてみなさい。」とお命じになられたので、（蔵人が削屑を）持って行って、（柱の傷に削り屑を）押しあててご覧になったところ、少しも違いませんでした。その削り跡は、大変はっきりとしているようです。後の世でも、（その削り跡を）見る人はまた、驚きあきれることだと申しました。

【省略部分】

四条大納言（公任）が、このように何事にもすぐれて、優秀でいらっしゃるのを、大入道殿（叔父の兼家）は、「どうしてあんな（に優れているのだろう）。うらやましいことだなあ。私の息子たちは、（公任の））影をさえ踏むことができなさそう（＝とても及ばないであろう）なのが残念なことだ」とおっしゃいましたので、中関白殿（道隆）・粟田殿（道兼）などは、まことにそのとおりであろうと思われたのだろう、恥ずかしそうな（面目がない）ご様子で、何もおっしゃらなかったが、この入道殿（道長）は、たいそう若く（官位もひくくて）いらっしゃったが、「（あいつの）影を踏まずに、つらを踏まないことがあろうか（踏んでやる）」とおっしゃったのだった。まことに（今では）その（言葉）通りでいらっしゃるようだ。内大臣殿（道長の次男、教通）をさえ、（公任は権大納言に過ぎないので）そば近くに寄ってお目にかかることもおできにならないのだ。しかるべき〔＝入道殿（藤原道長）のように後年偉くなるような〕人は、若いうちから度胸があって、神仏の御加護も強いのであろうと思われますよ